

[国 語]

児童の「もっと書きたい」を大切にしてい語彙を豊かにする指導

ー生活科との有機的な関連を図った表現活動を通してー

重野ひかる*

1 研究の意図

学習指導要領における国語科低学年「書くこと」の目標において、経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にして文章を書くことが求められている。しかし、筆者が昨年度担任した2年生児童20名(男子14名・女子6名)の実態を見ると、経験を通して考えたことや伝えたいことをすぐに書き始める児童がいる一方で、同じ言葉を繰り返したり、どう表現したらよいか分からなくて手が止まってしまったりする児童もいた。児童の実態として、語彙が少なく、十分に表現できないという課題が認められる。

中央教育審議会の平成28年12月の答申では、「低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあるとの指摘を踏まえ、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにするなど、語彙量を増やし語彙力を伸ばすための指導の改善・充実を図る。」¹⁾とある。思考を深めたり表現したりするために必要な語句を身に付け、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにする指導を充実させていく必要があると言えるだろう。各教科等における言語活動の充実を図る上で、語彙が豊かであることは、とても大切な要件となる。また多くの言葉を知っている状態に留まるのではなく、児童が思考・判断・表現する際に用いることができる使用語彙を、国語科を中心に身に付けさせていくことも求められる。

齊川澄子(1996)は、「体験活動が深まると、児童は内面に培われたものを表現したがらる。それは、体験活動によって感動が蓄積されているからである。」²⁾と述べている。また小林美和子(1990)は、「作文ははじめから終わりまで一つの事象のまとまりを書くことが多いが、まとまりのなかには山あり谷ありで、変化がある。それに対し、詩は、自分にとって心動いた場面を、そのときの思いや感じに合った言葉で端的に表す。」³⁾と述べている。

こうした指摘をふまえ、本研究では、生活科の体験活動との有機的な関連を図った国語科での表現活動を中心として、児童の語彙を豊かにしていくことをねらう。生活科の体験活動から気付き、考え、感じたことを自分の思いや感じに合った言葉で表現することを通して、「もっと書きたい。」という意欲を引き出したい。その上で、「もっと書きたい」という児童の思いを大切にしたい体験活動を表現活動と関連させて仕組んでいく。その方策として、視点を示した探検シートの使用及び詩の創作活動の効果的な設定を工夫する。この体験と表現のサイクルを繰り返していくことで、体験が言葉を豊かにし、表現活動が体験をより深めるという有機的な関連を図っていくことにした。

2 研究の目的

本研究の目的は、次の三つである。

- (1) 生活科の秋探検において、経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、音や様子を表す言葉という必要な項目を示した探検シートを用いることが有効であるかを明らかにする。
- (2) 児童の「もっと書きたい」という意欲を持続させ、探検シートに書き留めた内容をいきいきと表現するために、スモールステップとして連を意識した短冊シートを用いることが有効であるかを明らかにする。
- (3) 書く喜びが感じられるような友達との交流をすることが、児童の書く意欲を高めることに有効であるかを明らかにする。

3 語彙を豊かにする指導の構想

- (1) さまざまな詩との出会い(手立て1)

学習指導要領における生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して」⁴⁾から始まる。2年生の生活科は「季節の探

* 妙高市立新井北小学校

検」と「野菜栽培活動」の2本柱で実践した。体験の後の表現活動は、春探検後に、3行詩を書くことから始めた。普段書く活動がなかなか進まないA児も「たんぼぼさん たいようみたくて かわいいね」と書いた。児童が心動いた場面をいきいきと表現するためにも、語彙を増やすことや詩の表現方法に触れる必要がある。そこで、学級に五味太郎「言葉の図鑑」シリーズや詩集を置いて、いつでも読むことができるようにした。

(2) 生活科との有機的な関連（手立て2）

① 野菜栽培の詩の創作活動

ア 夏野菜の詩の創作活動

野菜に名前を付けていたため、詩を書くときは野菜に語りかけるように書く児童が多かった。また、図1のB児の「大きくぐんぐん 水やりぐんぐん」のようくり返しを使うようになった。春探検の詩はしたことや見たことが主だったが、さまざまな詩にふれることで表現の幅が広がった。

ありがとうございますゆうた
いままでげんき
おひさまにあたって
大きく ぐんぐん
水やり ぐんぐん
せいちよう せいちよう
いままでずっと
ありがとう

B児

図1 夏野菜の詩

イ 秋野菜の詩

夏野菜の詩の発表会をしたり、教室に掲示したりしたことで、友達の詩の工夫しているところを秋野菜の詩を書く時に取り入れている児童が見られた。図2の秋野菜の詩では、語りかけることや自分の気持ちに加えて、自分が気付いたことを書き表した。普段は表現活動が得意ではない「たんぼぼさん たいようみたくて かわいいね」の作者であるA児も観察したことや自分の思いを進んで書き表すことができていた。

だいこんのだいちゃん
だいちゃんのはっぱが
トゲトゲしているね
だいちゃんのはっぱが
むしにくわれたよ
びっくりしたよ
わたしがとってあげるね

A児

図2 秋野菜の詩

② 夏探検の詩の創作活動

児童は、夏探検で万内川砂防公園へ行った。夏探検を振り返る詩は、『学校図書みんなと学ぶ小学校こくご二年上』の詩教材「いろんなおとのあめ」の書き方になぞらえて詩作をすることにした。夏探検の川遊びと雨の音は、同じ水に対する擬音語や擬態語が重なるところもあるため、児童が多様な擬音語や擬態語にふれる第一歩となると考えた。「いろんなおとのあめ」は3連構成になっており、これを連のある詩作のモデルにすることとし、構成を図3のように1連（A）→2連（B）→3連（A'）とした。雨の音集めの経験があったことや、詩のモデルがあったことで、どの児童もすぐに書き上げることができた。

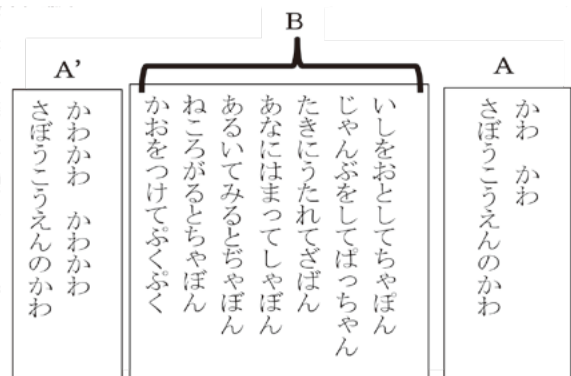


図3 夏探検の詩

(3) 書く喜びを感じるペア交流（手立て3）

夏探検の詩を読み合った時に、児童は「私は石を落とした音を『ぼとん』にしたけど、〇〇さんは『ちゃぼん』にしたんだね。それもいいね。」と感想を作者に伝えた。生活科で同じ体験をした児童同士で、書いたものを読み合ったり感想を伝え合ったりする機会を設けて、語彙の拡充を図った。

このように、一単元のみで語彙を豊かにすることを図るのではなく、単元を中核に日頃から言葉集めをしたり、おすすめの詩を紹介し合ったりするなど、さまざまな体験を詩に書き表したりすることを通して、語感を磨き、語彙を豊かにすることをねらいとした。

4 実践の概要

以下(1)～(5)に単元の実践の概要を示す。

- (1) 単元名「したことをいきいきとーかがやきっ子詩集を作ろうー」
- (2) 教材名「したことをいきいきと」（学校図書 下）

- (3) 単元の目標 言葉には音や様子を表す言葉を用いた伝え方があることに気付き、擬音語や擬態語を入れて、したことをいきいきと伝える詩を書くことができる。

【B書くこと(1) ア エ オ】【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(ア)】

(4) 単元について

生活科の時間に、児童と秋探検に行ったら何をしたいか相談したところ、「また詩を書きたい。」「学級詩集を作って読んでもらいたい。」という意見が出た。そこで、第2学年国語科「したことをいきいきと」(学校図書 下)を教材として取り上げ、擬音語や擬態語を使った詩の創作活動を行うことにした。詩集が完成したら誰に読んでもらいたいか相談したところ、国立妙高青少年自然の家(以下「自然の家」と表記)の方々や全校児童、畑の先生方が児童から挙がった。読む相手を決めることで目的意識を持続させながら詩作を進めた。

(5) 単元の展開(全6時間)

【生活科】*自然の家で秋探検(1時間)*学校の周りの秋探し(2時間)*防災公園で秋探検(1時間)	
次	主な学習内容
1	① 例示の詩(教科書の詩教材と「のはらうた」)を読み比べ、音や様子を表す言葉などの表現の工夫について考える。 ② 探検シートをもとに書きたいことを決める。
2	③ 探検シートから書きたいことを短冊シートにまとめる。 ④ 短冊シートをもとに、音や様子を表す言葉をつかった詩を書く。 ⑤ 詩を読み返して推敲し、清書する。
3	⑥ 出来上がった詩集を友だちと読み合い、よいところをメッセージカードに書き、伝え合う。

5 授業の実際と考察

(1) さまざまな詩との出会い

夏探検と同じく3連の詩を書くことにした。モデルとして教科書教材だけでなく、『のはらうたV』の「ありんこ・につき(図4)」も手本にした。「ありんこ・につき⁵⁾」は、1連と2連にはしたごとと擬音語、擬態語があり、3連は作者の気持ちでまとめている。児童はこの書き方なら真似しやすいと考えたためである。

(2) 生活科との有機的な関連

① 探検シートの工夫

経験したことや想像したことなどから書くことを見付け、音や様子を表す言葉を集めるために、視点を示した探検シートを用いた。探検シートの視点は、図5のように「体をつかってしたこと・かんじたこと」「見つけたもの・こと・ようす」「音」の3つにした。「ようす」や「音」という項目があったため、よく見たり、耳を澄ませて聞いたりして言葉を書き留めてくることのできた。児童が自然の家で見付けた語彙数は、平均9.3であった。防災公園で見付けた語彙数は、平均7.2であった。児童は、詩作するという目的意識をもって探検したことで、「しづくがぼうしにあたってピ

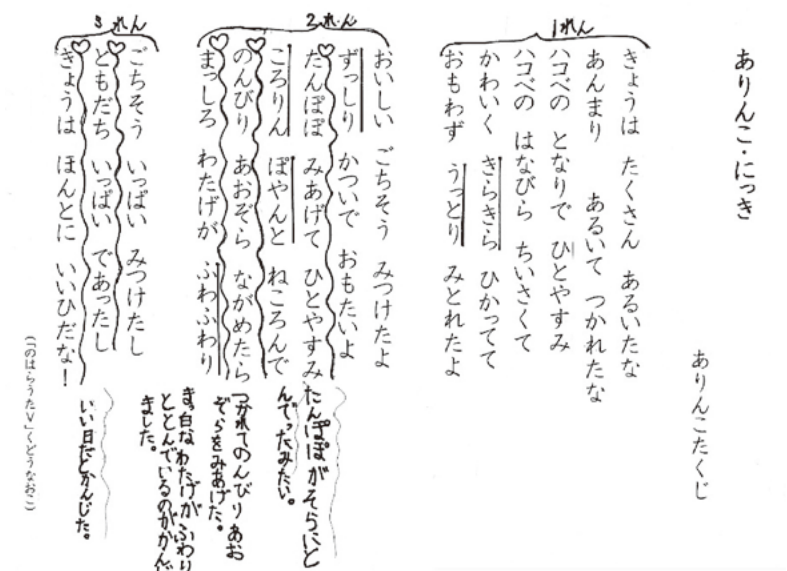


図4 ありんこにつきワークシート

チャン」のように、身の回りで起きたことを敏感に感じることができるようになった。加えて、「おちばをふんだらバリバリ」や「もみじをゆらしたらサラサラ」のように児童自身が主体的に周りの環境に働き掛けることにより、語彙を増やし、秋探検の中身を充実させることができるようになった。探検後の単元2時間目では、探検シートをもとに詩に書きたいことを決めて、目印のシールを貼った。図5、6の探検シートに見える黒丸が、目印のシールである。

手に伝えることにも挑戦させることにした。低学年の発達段階を考え、よいところは必ず伝えることとし、アドバイスは思いついた場合を書くことにした。付箋をもらう側は、アドバイスに納得したら取り入れることにした。ペアを変えて2回交流した。

黄色い付箋をもらって自分の表現を変化させた児童は3名いた。その中のE児は、「石をけたよ コロコロ ロボットみたいで おもしろいよ」を「石をけたよ コロコロコロ ロボットみたいで おもしろいよ」に変えた。

友達の短冊シートを読んで表現に触れることで、自分の表現を見つめ直したり、語彙の拡充をすることができたと言えるのではないだろうか。

ペア交流で友達に認めてもらうことで、児童は、自信をもって下書きをすることができた。これは、詩の下書きの振り返り結果（表1）に見るように、児童全員が全項目に対して肯定的評価をしたことに表れている。

表1 詩の下書きの振り返り結果

振り返り項目	20名中○をつけた人数
① 友達によいところを伝えた	20名 (100%)
② 音やようすをあらわすことばをつかった	20名 (100%)
② お気に入りの詩ができた	20名 (100%)

【メッセージ内容】・「おちばが後をついてきた」ってところがおもしろいね。・「ふわふわしてて モカちゃんみたいだよ」のところがよくわかるよ。すすきはひつじのモカちゃんみたいだったんだね。・サルノコシカケがおやこみみたいってかわいいね。・はっぱのふとんはがさがさして楽しそうだね。わたしも入ってみたいな。・「どんぐりころころ」と「すすきがさらさら」はわたしも書いたよ。いっしょだね。・おちばはかさかさしていたね。ほくは、さらさらって書いたよ。でもかさかさもいいね。・ゆきのつうろを歩いた音のシャキシャキって野菜をかんだみだいだね。

② 詩集完成後の交流

完成した詩集を読み合い、よいところをメッセージカードで伝え合わせた。下書きの前の交流では、読めなかった友達の詩を読むことができるため、児童は興味・関心をもってページをめくっていた。学級内の3人班の友達には、必ずメッセージカードを贈ることにしたため、どの児童もカードをもらうことができた。

児童は、友達から認められる経験を繰り返し積むことで、体験したことを「詩に書くことって楽しいな。」「見付けた言葉を上手に使うことができるようになって嬉しい。」と感想を述べ、満足感を得ていた。語彙が豊かになり、表現する方法を知ることによって、「これからももっと書きたい。」という意欲をもたせることができたと考えられる。図9は、C児が図5の探検シートをもとに書いた詩であり、図10は、D児が図6の探検シートをもとに書いた詩である。どの児童も単元目標を達成した詩を書くことができていた。また、日常的に詩を読んでいたことで、図11の「家ぞくみたいに大中小」のように擬人化する児童も認められた。



図9 C児の詩

6 研究のまとめと今後の課題

本実践を通して3つの成果と1つの課題が明らかになった。

成果の1つ目は、視点を示した探検シートを使ったことで、生活科の活動が充実したことである。児童は、「学級詩集を作りたい」という目的意識をもって探検したため、できごとを敏感に感じ取ることができた。春探検や夏探検のように視点を示した探検シートを使わなかった時よりも、秋探検の方が見付けた物の様子をよく観察し、耳を澄ませて音を聞くなどして、語彙量を増やすことができた。D児の「どんぐりころころがしてころころころ」のように、児童自身が、周りの環境に主体的に働き掛けることができていた。その結果として、児童の体験での気付きの質が高まり、いきいきとした表現の詩を作ることができたと考えられる。

